揖斐郡学校保健会だより　R8.11.2

R8 第65回岐阜県学校保健研究大会（大垣市大会）報告

令和８年１１月１日（日）　大垣市情報工房スインクホール

令和８年度第６５回岐阜県学校保健研究大会　大会テーマ
つながりが育む健康
～対話と絆で支える心とからだ～

Ⅰ　令和８年度第６５回岐阜県学校保健研究大会要項

第６５回岐阜県学校保健研究大会要項(兼第４７回東海ブロック学校保健研究大会)

（１）目的　　県下の学校保健関係者が一堂に会し、学校保健に関する研究発表及び研究協議を通じて学校保健の向上を図る。

（２）大会テーマ　　つながりが育む健康　～対話と絆で支える心とからだ～

（３）主催　　岐阜県学校保健会、岐阜県教育委員会、岐阜県医師会、岐阜県歯科医師会、岐阜県薬剤師会、東海ブロック学校保健会連絡協議会、大垣市学校保健会、大垣市教育委員会　（共催）(公財)日本学校保健会
事務局　　事務局長：大垣市教委学校教育課長　　事務局員：大垣市教委学校教育課　５名

（４）日時　　令和８年１１月１日（日）大垣市情報工房５階　スインクホール

12:30	13:00	13:40	13:50	15:10	15:20	16:40	16:45
受付	開会式 表彰式	準備	研究発表 Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ	休憩	記念講演	閉会 挨拶	

Ⅰ　令和８年度第６５回岐阜県学校保健研究大会の挨拶・講話・表彰より

（１）開会式講話
① 主催者挨拶　　岐阜県学校保健会　会長　伊在井　みどり　様（会長代理　磯貝　光治　様）
② 岐阜県教育委員会　教育次長　　高木　岳　様
③ 研究大会実行委員会　委員長　　沼口　諭　様
④ 来賓祝辞　　日本学校保健会　　専務理事　　弓倉　整　様
大垣市市長　　石田　仁　様

（２）表彰・・・令和８年度岐阜県学校保健会表彰（医師・歯科医師・薬剤師・校長・養教・栄教）
岐阜県学校環境衛生活動表彰（特選校・優良校・準優良校・努力校）
※揖斐郡からは令和８年度岐阜県学校保健会表彰で医師の野田宜輝様、歯科医師の乗松隆行様が受賞されました。

2　令和８年度第６５回岐阜県学校保健研究大会の研究発表より

（１）研究発表Ⅰ　【養護教諭部会】
「対話」で深める歯科保健教育　～コミュニケーションを通して～

（２）研究発表Ⅱ　【中学校保健体育部会】
「いのち」を語り合うがん教育　～対話がはぐくむ健康への主体的な意識～

（３）研究発表Ⅲ　【教育総合研究所】
心の健康課題とコミュニケーション　～不登校事例から学ぶ対話の力～

（４）研究発表Ⅳ　【社会的自立を支えるスキル育成推進校（江並中学校）】
心の健康を支えるコミュニケーション　～感情コントロールと対話による支援の実際～

（１）研究発表Ⅰ　【養護教諭部会】
「対話」で深める歯科保健教育　～コミュニケーションを通して～

- 生涯の健康を支える４つの力
健康に関する情報を自ら入手し、活用する力　　自ら意思決定・行動選択する力

自他ともに大切にしようとする心　　他者と関わる力

【研究仮説】
養護教諭の専門性を統合的に発揮し、コミュニケーションを生かした歯科保健教育を実践することで、子どもたちに身につけさせたい「生涯の健康を支える４つの力」を育成することができる。

【研究内容】
- コミュニケーションを生かした歯科保健教育の実践
- 養護教諭３３人の対話的学びの実践
- 具体的な目指す子どもの姿を明らかにするためのルーブリック表の作成（５つのラボ）
  エデュケーションラボ（集団指導）　スマイルサポートラボ（個別指導）
  ツールラボ（教材・ICT 活用）　ネットワークラボ・マネジメントラボ（組織的な取組）

【研究実践】
- コミュニケーションを生かした歯科保健教育の実践
  エデュケーションラボ（集団指導）　全体で学ぶことで意識が高まり、個別の対応につなげる
  スマイルサポートラボ（個別指導）　ハイリスク児童生徒への個別指導・学校歯科医との連携
  ツールラボ（教材・ICT 活用）　ICT を活用した異学年交流保健指導の実践
  ネットワークラボ（組織的な取組）　養護教諭を中心とした組織的な体制づくりの明確化
  マネジメントラボ（組織的な取組）　「チーム学校」として生徒が主体的に判断し行動する
- 養護教諭３３人の対話的学びの実践
  養護教諭同士が対話を行うことで、自分の強みを結合し、新たな試みにつなげるために、養護教諭部会では多様な形の「対話的学び」をとり入れ、年間を通じて学び合うことで、レベルアップ、ブラッシュアップにつなげた。
  ５月：キックオフ交流会→６月：アップデート交流会→７月：クロストーク交流会→８月：一人旅交流会
  ７月のクロストーク交流会は５つのラボの強みを生かすために、自分の所属するラボの強みを他のラボの仲間と交流を通して共有し、自分のラボの実践に生かすことを目的として行った。
- 具体的な目指す姿を明らかにするためのリーブリック表の作成
  研究を進めていくにあたり、目指す子どもの姿を考え、計画を立て実践し、計画を行っていく。
  ルーブリック表（レベル４の目指す姿　自律・主体的）
  情報入手・・・自ら情報を探し、比較・活用している。
  意思決定・・・自分で考え、選択し、意識して行動している。
  自他尊重・・・自他ともに大切にする言動や行動が見られる。
  関わる力・・・自ら関わりを広げている。

【成果】
- コミュニケーションを通して、子どもたちの感情を揺さぶることで、「やってみよう」「続けよう」とする姿が増えた。
- 養護教諭間の交流を深めることで、新たな気づきを得て、新しい実践につなぐヒントをうることができた。

（２）研究発表Ⅱ【大垣市中学校保健体育部会】

「いのち」を語り合うがん教育　～対話がはぐくむ健康への主体的な意識～

がん教育とは単に病気の知識を得るのではなく、がんについて正しい理解と、がん患者や家族などに向き合う人々に対する共感的な理解を深めることを通して、自他の健康といのちの大切さについて学び、共に生きる社会づくりに寄与する資質や能力の育成を図る教育である。
目的・・・生徒ががんについての知識を正しく理解するにとどまらず、がん専門医やがん経験者といった外部講師との「対話」や学習活動を通じて、健康や命の大切さについて主体的に考え、適切な態度や行動をとることができるようは指導手法および連携体制（大垣モデル）の確立を目指す

【研究内容】
- 市内の全中学２年で医が確実に学ぶことができる２時間程度の「がん教育（大垣モデル）の作成
- 生徒の関心や疑問を出発点に主体的な態度を生み出すとともに、がんへの正しい理解と命の尊さを深める
- １時間目：保健体育教員が実施する保健学習「がんの予防」の魅力的な指導の在り方
  ２時間目：外部講師（専門医及び経験者）を交えた学級活動（命の大切さ）の効果的な授業の在り方

＜大垣市中学校「がん教育」大垣モデルの基本構造＞
継続・発展が可能な「持続可能なプラン」であること　　生徒の主体的な学びの保障
教師と外部講師の適切な役割分担　　学校や生徒の実情に応じた柔軟性

【成果】
- 授業後の生徒の振り返りメッセージからは、単なる知識の獲得にとどまらない、深い意識変容と主体的な態度の高まりが見られた。
- 健康に対する主体的な意識の向上、患者・経験者に対する理解と共感、命の大切さの実感が育った。

【推進体制（行政・医療・学校の連携）の確立
- 大垣市では行政（教育委員会・保健衛生部局）、医療機関（医師会・市民病院）、学校が密接に連携している。
- 岐阜県教育委員会「学校におけるがん教育の手引き」におけるがん教育岐阜モデルとも調和をはかりつつ、地域全体でがん教育を支える持続可能な体制が整っている。
- 普及啓発への教育委員会の役割・・・がん教育を推進していくためには教育委員会の役割が重要である。外部講師を活用したがん教育は国や地方公共団体独自の予算で取組が始まったところであり、今後すべての学校でがん教育を推進するためには、教育委員会の協力のもと、地域の実態に応じた取り組みを行うことが重要である。　（文科省　外部講師を活用したがん教育ガイドライン）

（３）研究発表Ⅲ　【教育総合研究所】

心の健康課題とコミュニケーション　～不登校事例から学ぶ対話の力～

【研究内容】
（１）　児童生徒の状況を把握するための初期対応の徹底
- 一人一台端末を活用した「こころの健康観察」の実施
- 児童生徒の欠席に係る初期対応の徹底
- 「チーム学校」による連携・アセスメントの実施

（２）　児童生徒一人一人の状況に応じた支援体制の構築
- 校内教育支援センターの設置と「ほほえみ相談員」の配置
- 校外教育支援センター「ほほえみ教室」、「とまり木教室」の運営
- ほほえみスタディサポート（ＨＳＳ）による支援
- メンタルフレンド（ＭＦ）による支援
- 相談員による登校支援
- インターネット仮想空間「メタバース」を活用した支援

＜大垣市教育総合教育研究所による支援＞
大垣市教育総合研究所では、多様かつ複雑な要因を抱える児童生徒に対し、一人一人の状況に応じた支援を整備している。

① 教室にはいることが困難な児童生徒への支援・・・すべての小中学校に「校内教育支援センター」を設置し、「ほほえみ相談員」を配置することで、教室以外の安心できる居場所を確保
② 毎日の登校が困難な児童生徒への支援・・・学習や活動への意欲がある不登校児童生徒への支援には「ほほえみ教室」、家族以外との関わりが難しく引きこもりがちな児童生徒には、フリースペースの「とまり木教室」をいう機能の異なる二つの校外の居場所を運営している。
③ 登校が困難かつ学習面にも不安を抱える児童生徒への支援・・・教員免許をもつ登録学習支援員が自宅を訪問して、学習を支援する「メンタルフレンド（ＭＦ）」を行っている。
④ 登校への意欲はあるが実際の一歩が難しい児童生徒への支援・・・生徒指導相談員が家庭訪問し、一緒に登校する「登校支援」を行っている。
⑤ 対面でのコミュニケーションに強い不安を抱える児童生徒への支援・・・インターネット仮想空間「メタバース」による支援。アバターを介することで人と直接対面で話さなくてもよい、安心できる居場所を提供している。

【成果】
- 欠席３日の児童生徒に対する家庭訪問やケース会議の実施など、適切な初期対応が定着したことにより、新規の不登校生と児童数の増加が抑えられた。
- 「チーム学校」による職員間の連携体制やアセスメントの重要性が浸透したことで、児童生徒一人一人の実態に寄り添った支援体制が構築できた。
- 令和６年度不登校であった児童生徒のうち、令和７年度には５８人、令和８年度には７２人が不登校でなくなった。

（４）研究発表Ⅳ　【社会的自立を支えるスキル育成推進校（江並中学校）】

心の健康を支えるコミュニケーション　～感情コントロールと対話による支援の実際～

- 江並中学校は令和６年度より大垣市教育委員会の指定を受け、「社会的自立を育むスキル育成事業」に取り組んできた。生徒の居場所を作り、生徒同士の関係性を構築するために「構成的グループ・エンカウンター（SGE）を基盤として全校での取り組みを実施した。
- 生徒が主体的に参加できるような楽しい活動を仕組むことができれば、社会的自立を支える１０のスキル（生活管理のスキル、基礎学力のスキル、問題解決のスキル、協同のスキル、責任のスキル、能動のスキル、規律のスキル、精神安定のスキル、現実検討のスキル、環境調整のスキル）の向上につながると考え、学校全体で対話と交流の機会を定期的に位置づけた。

【研究仮説】

「人と関わる楽しさ」を生み出すSGEの年間カリキュラムを工夫し、生徒の「気付き」を促す指導を工夫すれば、社会的自立を支えるスキルを育成することができる。

【研究内容】

（１）重点スキルを明確にした生徒の願いをとり入れた年間カリキュラムの工夫

① 重点スキルを明確にした年間カリキュラムの作成
　重点スキル（能動・精神安定・協同・問題解決）を明確に位置付けた実践計画の策定

② 生徒の願いを柔軟に取り入れた年間カリキュラムの工夫
　生徒の振り返りや発案などの「～したい」という自発的願いを次年度計画や行事に即時反映

③ 自己理解（自分に「気付く」）を促す指導の工夫
　YWT法（やったこと・わかったこと・次にやること）を応用したフレームによる省察の深化

④ 他者理解（仲間に「気付く」）を促す指導の工夫
　非言語コミュニケーション（表情・しぐさ・態度）や相手への気配りを意識させる工夫された声かけ

（２） 自己理解（自分に「気付く」）を促す指導の工夫

● ポジティブ内省フレーム「YWT法」を導入し、教師の声掛けを標準化した。
　Y（やったこと）　「今日はどんな工夫をして取り組んだ？」「どんな話をした？」
　W（わかったこと）　「どうしてうまくいったと思う？」「自分の感情はどう変化した？」
　T（次にやること）　「この関わり方を普段の授業や生活にどう生かせるかな？」「次はどうしたい？」

（３） 他者理解（仲間に「気付く」）を促す指導の工夫

● 相手の表情や口元、身振り・手振りに注意を払う活動を通して、他者理解と非言語コミュニケーションの重要性に気付く（協同・問題解決）

【成果】

● 重点スキルとのつながりを考えたSGEを実践したことで「授業が楽しい」、「みんなと考えると分かる気がする」などの肯定的な意見や異学年交流を楽しみながら行い、様々な活動を行うことができた。

記念講演　「生きる意味」の豊かさへ　～つながりと深い支えが人生を輝かす～

講師　東海学園大学教授、東京科学大学特命教授、東京工業大学前副学長　上田　紀行　氏

【講師紹介】上田　紀行　氏

文化人類学者　著書に「生きる意味」（岩波新書）、「立て直す力」、「とがったリーダーを育てる」（中公新書ラクレ）などがある。

「生きる意味」の「はじめに」より

私たちが今直面しているのは「生きる意味の不況」である。・・・自分たちが今ここに生きている意味が分からない。自分などいなくてもいいのではないか。自分が自分でなくてもいいのではないか。そんな社会は決定的におかしいと私は思う。・・・経済的不況が危機の原因だという人は多い。しかし、わたしたちの多くは既に気づいている。問題の本質はもっと深いところにあるのではないか。・・・私たちの「生きる意味」の豊かさを取り戻すこと。そのためにこの本は書かれている。

【講演の概要（講演で語られた内容）】

● 自己肯定感の低下、他者の評価を気にする、失敗を恐れる人が増えている。
● 個別最適な学びが本当にできているのか。教師の自己肯定感、教育が今の時代をかえていくという強い思いをもつことが必要。
● 人は自分の言葉をもち、自分の言葉で語るリーダーについていく。
● 人が生きていく根本には、「生きる意味」の自覚や楽しさという内発的な意味こそが必要。
● 生きる意味を実感し、自分はかけがえのない存在だと思わず、自分は交換可能な存在だと考えてしまう日本人が多い。
● 日本人はいいところがあっても、他によくないところがあるとか、他者と比べて、いいところを認められない。（アメリカ・中国・韓国に比べても日本の自己肯定感は極端に低い。）
● ここがだめだと足りないところを埋めるのではなく、自分の強みを見つけて育てていくことが今こそ大切。
● 主体的な世界を「努力すればできる」と考えて作っていくことが必要。そのために「何をしたいのか」という志を語ることが必要。
● 子どもたちに自分の良いところを探し、自分が向いていることを自覚させることが大切。
● 人は苦しんだり、苦悩した時に、自分を支えてくれる人に出会い、「つながり」に気付く。「つながりと深い支え」こそが人生を輝かせ、生きる意味の豊かさを生み出す。
● 頑張っているのにつらい目にあうことがあるが、支えがあると救われる。教育に携わる者がそう考えることが子どもたちの力になる。
● 鈴木大拙の言葉・・・「ものがその本来の性分から湧き出るのを自由という。松は松として、竹は竹として、山は山として、河は河として、その拘束のなきところを、自分が主人となって、働くのであるから、これが自由である」